『米欧回覧実記』久米手稿

――『那不児府ノ記』（ナポリ訪問）の場合――

藤沢桜子[1]・藤澤明寛[2]

（1）群馬県立女子大学
（2）早稲田大学

『米欧回覧実記』（以下、『実記』）は、明治四（一八七一）年から六（一八七三）年にかけて欧米を視察した、いわゆる「岩倉使節団」の報告書である。明治十一（一八七九）年に太政官記録掛により『特命全権大使 米欧回覧実記』として博聞社から刊行された。権小外史として大使に随行した久米邦武によって「編修」され、全五編、全百巻で構成されている。

明治六年五月九日にドイツからイタリア入りした使節団は、同月十九日夜にローマを出発して南イタリアへと向かい、翌朝「那不児（ナアプル）」すなわちナポリ近郊のカセルタ訪問を経て、夕刻にナポリに到着する。翌二十一日に現ナポリ国立考古学博物館などを見学、二十二日には、近郊のポンペイ遺跡などに赴き、二十三日にナポリを出発し、ローマに戻った。ナポリ三泊四日の旅である。『実記』には二十四日の動向は記されておらず、翌二十五日に「皇帝」（イタリア国王ヴィットリオ・エマヌエーレ二世）に別れの挨拶を告げ、二十六日夜にヴェネツィアに向けてローマを出発した。『実記』第四編「第七十七巻　那不児府ノ記」には、以上のナポリ訪問からローマ出発までが綴られている。

これまで『実記』七七巻に関しては、おもに刊行された『実記』における記述やイタリア側の資料をもとにした研究は進められているものの、久米筆の初期原稿を中心に扱ったものはなかった。本稿では、『実記』関連史料から久米手稿「那不児府ノ記」（文書番号八三、図1）をとりあげ、未刊行であった本史料を活字化した。使節団の見学先や記録の対象物を中心に註を付した。

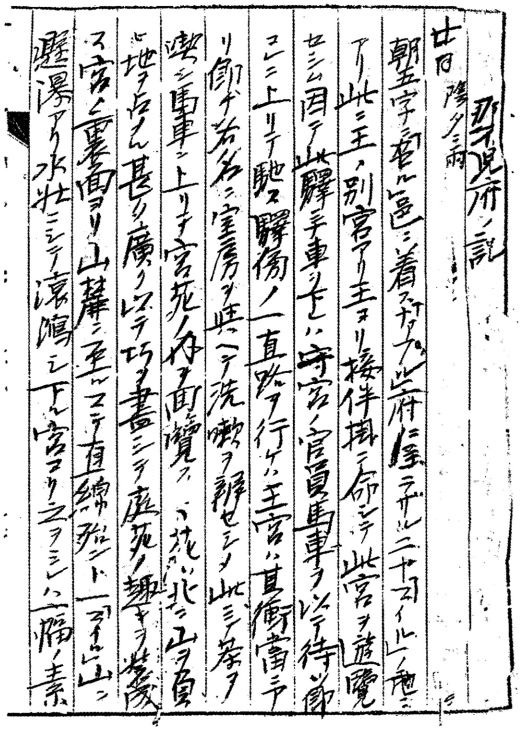

図1　久米手稿（文書番号83、久米美術館蔵）

なお、本史料に挿絵はないが、『実記』との比較過程で挿絵に関して考察したため、末尾に補論を付した。

『実記』関連史料は、田中彰「『米欧回覧実記』の成稿過程」（同『岩倉使節団の歴史的研究』岩波書店、二〇〇二など）において、その複雑な成稿過程とともに分類・整理されている。本史料は、そのなかで初期の原稿（b）すなわち「青罫紙などに記され、日記の体裁をとりはじめている」ものとして分類され、「文書番号八三」として登録されている。浄書などに用いられた太政官罫紙ではなく、「金花堂」の名が印刷された半丁十一行の黒罫紙に久米自身の手によって墨書されている。表紙はなく、冊子の形もとらない。題名はあるが、巻数の記載はない。体裁は、すでに刊行本『実記』と同様の日記形式になっている。

現存する史料では、久米が回覧中にメモをとった手帳（『久米邦武文書 三』「手帳・ノート（A）」）に一部記述が認められるものの、『実記』七七巻に相当するまとまった記述としては、本史料が最初のものとされる。

本史料以降で認められるナポリ訪問に関する記述は、現存する史料では、「白表紙本」すなわち『米欧回覧日記　四編（中・下）』（文書番号G一七）にある。白表紙本は浄書稿で、これを久米が加筆・訂正している。刊行に至るには、さらに浄書および補訂が繰り返されている。本稿では、本史料と白表紙本また刊行本『実記』との記述内容における大きな変更にも注目した。それによって明らかになった点をここにいくつか挙げておく。

まず、本史料は、おそらく手帳などの身近な資料や記憶をもとに書き綴ったものと推察される。たとえば、ナポリの人口数に関する箇所では、「四十［空白］」と途中までしか記入されていない。久米は、本史料執筆時には、後で確認するつもりでいたのであろう。一方、白表紙本では、人口数は一桁の数まで浄書されている。

次に、白表紙本の浄書で大幅に追加された内容として、ナポリ到着後に食した「紅蠶（タイ）」に関する記述がある。さらに久米による訂正があり、『実記』と同記述となる。また、本史料と白表紙本の浄書にはないが、浄書に久米が別紙で追加した例もある。統一戦争時代のナポリに関する記述で、この追加で『実記』と同一となった。

また、白表紙本では削除されているものもある。本史料では、現ナポリ国立考古学博物館で書き写した文字を載せているが（図2）、白表紙本にはない。漢学者である久米が碑文に対して興味を抱いていたことをうかがわせる貴重な箇所である。なお、成稿過程初期の図が後に削除される例があることは知られている（久米美 二〇〇六：一七―一八）。

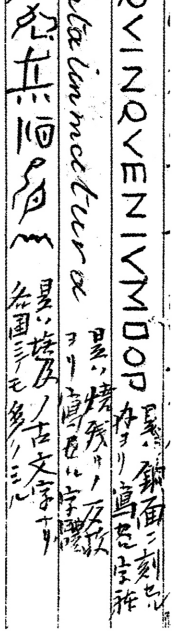

図2　久米手稿、ナポリ博物館の文字

これらのことから、本史料は、白表紙本と内容的にも近似しているものの、大きな変更点もあるため、白表紙本との間に原稿がまだ存在していたことが具体的に明らかとなった。なお、ナポリ訪問の巻に関しては、白表紙本に久米筆の訂正が加わったものと刊行本とでは、博物館での模写生とのやりとりが削除されている以外には内容に大きな相違は見られず、白表紙本訂正の段階で記述内容はほぼ確定したようである。

凡　例

一、本史料に句読点はないが、適宜、読点「、」を付した（固有名詞の読点は原文のとおり）。
一、訂正箇所については、抹消部分を二重取消線で示した。
一、漢字は新字体を用い、適宜、平仮名ルビを付した。

一、表記の揺れについては、初出箇所の註のみにとどめた。
一、［アラビア数字］は頁（半丁を一頁とする）、○は原文のほぼ一字スペースを示す。

［1］那不児府ノ記[1]

廿日　陰夕ニ雨

朝五字ニ「カセル」[2]邑ニ著ス、「ナァプル」[3]府ニ至ラザルニ十「マイル」ノ地ニアリ、此ニ王[4]ノ別宮アリ、王ヨリ接伴掛ニ命シテ、此宮ヲ遊覧セシム、因テ此駅ニテ車ヲ下レハ、守宮ノ官員、馬車ヲ以テ待ツ、即コレニ上リテ馳ス、駅傍ノ一直路ヲ行ケハ、王宮ハ其衝当ニアリ、即チ各名ニ室房ヲ与ヘテ、洗嗽ヲ弁セシメ、此ニテ茶ヲ喫シ、馬車ニ上リテ、宮苑ノ内ヲ回覧ス○苑ハ北ニ山ヲ負ヒ、地ヲ占メル、甚タ広ク、以テ巧ヲ尽シテ、庭苑ノ趣ヲ装成ス、宮ノ裏面ヨリ、山麓ニ至ルマテ、直線殆ント一「マイル」、山ニ懸瀑アリ、水壮ニシテ滾瀉シ下ル、宮ヨリ之ヲミレハ、一幅ノ素［2］練ヲ挂ルカ如シ、其水甃石ノ方塘ニ落チテ、層々ニ流レ下ル、六七町ニテ地底ニ落チ其跡ヲミス、其前ハ白沙雪ノ如ク、緑艸氈ノ如ク、樹ヲ植ル、井井トシテ法アルカト見レハ、錯綜トシテ乱レ、森蔚トシテ林ヲナス、直路円道其曲折ヲキワム、○樹間ノ路ヲ歩スレハ、清蔭ヲ掩ヒテ天ヲミス、一路空洞ニシテ、嵐気為メニ青シ、路窮リテ亭アリ、池アリ、曲折ノ路、盤迂ノ径ヲ開キテ、花卉時ニ咲ヒ、芬菲トシテ媚フ、巨木老幹天ヲ劈シテ躍リ立アリ、緑陰滴ント欲シ、翠嵐衣ヲ侵ス、○是ヨリ山足ニ回リ出テ、瀑布ノ左右ヲ攀援ス、羊腸屈折シテ上リ、瀑布ノ上ニ至レハ、岩亭アリ、水其底ヨリ流レ落ル、水壮ニ、石岩コレヲ隘シ、溜然トシテ響キヲナシテ下ル、此亭ニ上リテ、南［3］望スレハ王宮ノ粉壁、皎然トシテ前ニ偃シ列樹ノ道碁枰ヲ分ツカ如ク「モンビシウェシビゥス」[1]ノ火山、突兀峻拔、烟ヲ吹キテ前ニ立ツ、「ナアプル」ノ湾、烟花一簇、其前ニ集ル欧洲高名ノ山水ヲ領略シテ、一目ノ中ニアリ、亦愉快ノ佳境ト云ベシ、瀑ニ従ヒ下リサレハ、瀑前ノ甃池ニ、大小ノ石像ヲ設ケ飾ル、以大利[2]ノ名工ト名石トヲ以テ力ヲ極メテ雕刻セルモノニテナレハ、一トシテ神ニ入ラサルナシ、是ヨリ左ナル苑ヲ回ル、樹木散植シ、花艸其内ニ雑ル、其勝ヲ探リ偏クセントスル、日瞑スルモ亦尽キサルナリ、是ヨリ花窖ヲ回リ瀑布ノ落去ル下層ノ地ヲ極メテ宮ニ帰ル、宮中ニテ昼餐ノ供アリ、食畢リテ宮ノ内景ヲ回覧ス、名画名器ヲ列スル無数ナリ、

［4］四字ヨリ蒸気車ニ上リテ発シ、六字ニ至ラサル時ニ、「ナァフル」ノ駅ニ達ス、羅馬ヨリ此マテ百六十二「マイル」半、駅ニテ馬車ニ上リ、半字二十分間行ヲ費シテ、「ホテル、テ、アングリテー」[2]ニ宿ヲナス、[3]此時雨フリテヤマス

廿一日　雨

「ナァフル」府ハ、以大利半島ノ西方[4]ニ於テ、一海湾ヲ占メテ開キタル要港ナリ、北緯四十度五十二分、東経十四度十五分[5]ニ位シ、人口四十○○○○○○人[6]、以大利ニ於テ第一ノ都会ナリ、此ハ元「キンク、オフ、ナァフル」[7]トテ、以大利ノ南方ニテ強大ノ土壌ヲ占メタル王国ノ都ニテアリシテ、今ヲサル十二年前[8]以大利一統ノ乱ニ「サルヂニヤ」[9]家即今ノ王家と戦ヒ、破レテ国滅ヒ、其宮殿[10]［5］今ハ廃シタリ、府中ノ中央ニ於テ、白堊皎然トシテ存シ、兵アリテ之ヲ守ル、其他府中ニ大寺巨観ノ目ヲ嘱スルモノ少カラス、海湾ニソヒテ古城[1]アリ、圮壁儼然、葛藤ヲ帯ヒテ立ツ、○府中[2]ノ街路ハ甚タ狹隘ニテ不規ナリ、一体此府ハ海水数ノ弓湾ヲナシ、湾ニソヒテ岡嶺環繞シ、水山ノ間ニ、一帯ノ壌地アルニスキス、港上ノ市甍ハ、此平地ヲ占メテ起リ、遂ニ山麓ニ溢ルヽヲ以テ、市街ノ設ケモ、亦是ニ仍ルハ、且ツ古キ都府ニテ街路モ法ヲ得ス、地上ノ甃石ハ、羅馬ト同シク、石大ニシテ粗ナリ、多クハ車歩ノ別ナシ、屋店高ク、六七層ノモノ相並ンテ立ツ、往々ニ同道ヲ歩スルカ如キ所多シ、○府中ノ人、懶惰性ヲナシテ、塵芥掃ハス、車馬［6］狼藉ナリ、市人路傍ニ立チ、露肆シテ物ヲ眩鬻シ、或ハ花ヲ以テ行車ヲ追フテ、買ンコトヲ勒索ス、海岸街衝ニハ、丐児群ヲナシ、貧民筐ヲ枕ニシ、石ヲ床トシテ眠ルモノアリ、或ハ巻烟草ノ喫余ヲ拾ヒテ、長短ヲ連ネテ売ルアリ、晴ニハ塵埃目ヲ眛シ、臭気鼻

ヲ撲ツ、民ミナ天主教[1]ヲ宗信シ、路傍街衢ニ、十字架磔刑ノ図、馬利耶蘇ヲ抱クノ図ヲ掲ケテ礼ス、以大利ニ貧民多シ、羅馬ハ仏羅稜[3]ヨリ甚シ、此ハ又羅馬ヨリ甚シ、此行欧米十二国ノ各都府ニテ、此府ヨリ清潔ニ乏シク、民懶ニシテ丐児ノ多キヲミルコトナシ、支那ノ上海一変シテ「ナァフル」ニ至ルト云モ可ナリ[4]

［7］「ナァプル」府ニ高名ナルモノ三アリ、一ハ「モンウェシビシウス」ノ火山ナリ、欧洲ニ火山少シ、此山海湾弓ノ如キ浜ヨリ抽テ[1]、峰容ノ特兀ニテ奇峻ナル、画トモ成ナラサルノ美アリ、頂上ヨリ烟ヲ吹ク、白雲ノ驀起スルヲ疑フ、夜ハ火光噴出シ、時アリテハ半天ヲ焦ス、欧洲ニテ之ヲ艶称シ、図シ、模シ、彩影シテ至ル所ニ伝播セル猶我邦ノ富嶽ニ比スベシ、〇一ハ「ポンペイ」邑ニテ、地底ヨリ掘リ出セル紀元ノ比ノ城市ナリ、事ハ明日ノ条ニ詳記スベシ、其地ヨリ採拾セル古器ヲ集メ、他ノ古物ト共ニ一ノ大博物観ヲ設ク、其称高シ、此日ノ朝、駕シテ其観ニ至ル、堂構ノ美ナル、已ニ其宏壮ヲキワム、内ニ充テタル古キ器物、図書、石像甚タ多キ内ニ「ポンペイ」ヨリ出テタル篏石ノ細工、屋壁ニ［8］存セシ藻繢、人物、宮室ヲ写セル画図、殆ント二千年ヲ歴テ儼然タリ、其時ノ焼キ残リノ反故紙アリ亦灰燼シ、炭トナリテ存セル文字アリ、銅鐫ノ希臘文字、又埃及ノ古物、其多キコト幾室ナルヲ知ラス、四方ノ遊客ミナ日日ニ来リ、写ス、実ニ希代ノ珍蔵ナリ、歴観ノ際ニ忽ニ写セル古文字ヲ左ニ録スベシ、

OSTQVINQVENIVMPOP　是ハ銅面ニ刻セル内ヨリ写セル字体[3]

Pianta immatura　是ハ焼残リノ反故ヨリ写セル字体[4]

［図2］　是ハ埃及ノ古文字ナリ、各国ニテモ多クミル

又「ポンペイ」ヨリ出テタル古時妓楼ト覚シキ屋中ニアリタル戯ノ諸器アリ、甚タ猥褻ニテ、奇古ナリ、是ハ戸ヲ鎖シ、只男子ノミ入レテ観セシム、婦人ハ入ルモノナシ、〇画楼ニハ名［9］画ヲ多ク集メ、画師集リ、学ヒ模ス、一人アリ、[1]模写正ニ畢ル、就テ熟視スレハ、其画ノ謂ヲ解説スルモノ、如シ、既ニシテ言ノ了了ナラサルヲ知レルニ似タリ、鉛筆ニ書シ示スヲミルニ其画ノ価ナリ、此価ニテ買ヘト云所ニテアリケリ、西洋ノ民物ヲ売ルニ切ナルコト満地ミナ然ラザルナシ、以大利ノ人尤モ甚シ、殆ント袪ヲ引テ勒索シ、売ルニ至ル、而テ価ヲ燿眩スルノ甚シキ物ニヨリテハ、三分ノ一ニ折シテ、竟ニ肯ズルニ至ル、〇上層ニハ書庫[2]アリテ、古書ヲ蔵ス、此観ノ屋造ハ、総テ石ヲ以テス、書庫ノ甃石上ニ、子午線ヲ斜ニ画シテ、十二宮ノ象図ヲ、篏石ニテ、細工ヨリ、正南壁ニ一孔ヲ穿ツテ月光ヲ漏シイル、毎月ニ月ノ青道躔ヲ異ニス、其光リ孔ヨリ漏シテ、此十二ノ象［10］図ヲ往来スルヲミルナリ、西洋ニテ太陽ノ正午ヲ測ルハ、至ル処ミナアリ、月宮ニ至リテハ、西洋ニテ余リ窮ムルモノナキニ似タリ、意フニ月ヲ歩スルハ太陰暦流ノ行国ノ習ハセナラント、今スナハチ如此ノモノヲミル、夫レ西洋ノ天文ニ精ヲ尽ス木星四月ノ蝕ヲ推歩スルニ至ル、夜ノ明暗ニ関スル青道月行ノコト、豈ニ漠然ニ付センヤ、天地間ノコト研究セサルナシ、是文明ノ文明タル所ナリ、我邦ノ近来多ク西洋ヲ認メテ、簡易ト看做シ、従来ノ稍明カナルモ省キテ、之ヲ棄テ自ラ以テ開化トシ、文明トスルモノモアリ、是猶木ニ援テ魚ヲ求ルノ類ナリ、〇此外、銅器、陶器、石器ヲ亦無類ノ類、一千五六百ノ数ニ至ル、「カルカラ」帝浴場館ニアリシ水盤[1]アリ、其径一丈五尺ニ、［11］軒廿丈三尺許ノ楕円形ナル大盤ナリ、羅馬ノ古代ニ、巨大ノ器ヲ造ル、往々ニ如此シ、驚是東洋豈ニ支那ノ露盤仙掌ヲ以テ漢武ヲ奢レリト云ヘケンヤ、

其一ハ珊瑚ノ細工ハ当府ノ名産ナリ、市街ノ内ニハ檐ヲ比シテ、珊瑚ノ細工ヲ売ル、大ナルハ玉トナシ、小ナルハ花ヲ造ル、或ハ枝ニテ売リ、或珠子ニテ売ル、仏羅綾ノ篏石細工「ウェニシ」[1]ノ玻璨細工ト此ヲ幷セテ、以大利ノ三絶ト云ヘシ、若夫レ油絵石像ノ工ハ、仏羅稜、羅馬、共ニ多シ、其他以大利ノ名産ハ、絹布類、鏡及ヒ扁額ノ縁、薄紋ノ棉布等、スベテ纖巧ノ器物ハ、工密ニテ価廉ナリ、至ル処ミナ之アリ、

此府ニモ古蹟多シ、海湾ニ斗出セル一小島ニ岩壁ノ古［12］城[1]アリ、南方ノ岡阜ヲ刳シテ、岩洞ヲ開ク、高サ二丈餘、長サ十余町、両壁ニ

燈ヲ点シテ、闇ヲ照ス、車馬往来スベシ、亦上古ニ穿鑿開セルモノナリ、別ニ「コロシュム」ニ似タル観場ノ基礎モアリト、逗留日少ク一一ニ探ルニ遑アラス、○南方ノ山上ニ一宮アリ、仏将某ノ築キタルモノニテ、頗ル宏壮ナリ、庭苑尤モ広ク、海湾ノ眺メ甚タ快シ、諸禽ヲ養ヒテ艸中ニ戯ル、此日午後ヨリ雨降リテ、回覧ニ便ナラス、粗府中ノ梗概ヲミル、此ニ止ル、固リ其一般ニスキザルナリ、

二十二日　陰晴変幻多シ

朝八字ヨリ、馬車ニテ北方ヲ走ル、十二「マイル」ニテ、「モン、ウェシビシゥス」火山ノ麓ナル、「ポンペイ」村ニ至ル、村ニ人家少シ、約六七［13］戸アリ蕭条タル村落ナリ、此処ハ古代ニハ城邑アリテ、人口四五万ニモ及フ繁庶ノ地ナリシニ、紀元五十六年ニアタリ、火山ノ火脈噴発シ、土灰ヲ飛ハス甚シク、一夜ノ内ニ城邑ヲ挙ケ土灰ノ底ニ埋没シテ、全ク烏有ノ平野トナリニケリ、是ヨリ一千八百年ニモ及フマテ、桑田碧海ノ変遷誰ヲ其上ニ麦田、牧地ヲナシテ、其古ヘヲ記スル史モアルカナキニテ、誰モ定カニ此地ノ城邑ヲ埋メタル所ナルヲ瞭知セルモノモナカリシニ、偶爾ノコトニテ、地下ヨリ古キ屋壁ヲ掘リ出シ、奇異ノ思ヒヲナシ、益之ヲ掘ルニ、到ル処ニ奇蹟アリ、博古ノ士、因テ其古時埋没ノ城邑ナルコトヲ考ヘ出シ、是ヨリ人ヲイレテ掘リ撥シキ、今ニ至ルマテ其三分ノ一ヲ掘リ出セリ、二千年ニ垂ンタル古邑［14］ノ地底ヨリ出デタレハ、四方ヨリ之ヲ聞クモノ、誰カ奇異ノ思ヒヲナサンラン、此事欧洲ニ隠レナク、来リ観ルモノ日々絡繹トシテ今ニ絶ヘス、○「ポンヘイ」邑村ヨリ一岡ヲ上レハ、関門アリ、門ヲ入レハ、側ニ一宇ノ博物観アリ、地底ヨリ得タル古物ヲ蓄フ、灰土ノ内ニ斃レタル死屍ヲ其儘ニテ、灰ヲ幷セテ收メ、アケテ、台ニ上セタルモノ二両三アリ、一ハ丈夫ノ屍ニテ仰キ臥ス、一ハ婦人ノ形ニテ伏シタル、其後ニ其娘ト覚ヘテ巾ヲ以テ目ヲ掩フタル形ニテ死セリ、或ハ云泣キ伏シタルナリ、或ハ云飛灰ヲ掩フタルナリ、指ニ金環ヲ貫ク、一視シテ憫然ナリ、○器皿ノ類甚タ夥シ、一鍋アリ、円クシテ凹シ、中ニ小豕ノ骨アリ、脅骨、首脚ミナ完シ、是ハ正ニ之ヲ煮ルトキニ灰土ニ［15］埋マレタルモノナルベシ、其他ノ器皿ヲミルニ、ミナ今ノ西洋ニ用フルト大概異ナル所ナシ、○是ヨリ進行スレハ、古ノ市街ニ入ル、街路ノ広サ一車ヲイレテ余リアルアリ、両車相逢フニ絶ヘタルアリ、両側ヲ高クシテ、砌アリテ、人ヲ往来セシム、十字ノ衝ニハ飛石アリテ、車ハ其石ヲ挾ミテ去ルヘシ、ミナ石ヲ甃ス、石ハ天然ノ平石ヲ択ミ用フ、故ニ凹凸多キヲ免レス、石面ニ車輪ノ轍アリテ、痕跡ヲ存ス、是ヲ以テ知ル、西洋ノ路ヲ修メ人車馬ノ行ヲ分チ、石ヲ甃シ車ヲ用フル等、上古ヨリ風俗自ラ然ルヲ、○市店ノ前ニ、往々銅ノ管ヲトオス、捻釘ノ頭アリ、屋ハ多ク平地ヨリ築キ起ス、窖ヲ掘リタル跡ナシ、石柱瓦壁、或ハ塗ルニ石灰ヲ以テシ、面ニ花紋ヲ印シ、［16］人物鳥獣ヲ繢ス、窓口小シテ壁甚タ厚シ、大約ハ今ノ屋造ニ異ナラス、屋室ミナ、其上宇ハ存セルモノナシ、上下ニハ石ヲ甃ス、多ク篏石ノ細工ヲナス、○博学ノ士、古史ヲ照シ、城邑ノ古図ヲ得テ、此街屋ニ就テ、此処ハ「バンク」ノ跡ナリ、此ハ裁判所ノ跡、学校ナト、多分其考ニ就ク、浴場店アリ、其規模小ナラス、一区ニハ妓花街アリ、小室ヲ区分シテ、ミナ土床アリ、枕辺ヲ凸ニス、戸ノ上頭ニ画ヲ存セルアリ、多ク淫褻ノ図ナリ、大ナル楼ニハ会堂アリ、春画ヲ画ク甚タ完シ、画様今ト異ナラス、花街ノ内ニ、一大ナル釜ヲスヘ、石磐ヲオキタルアリ、云コレ石鹼ノ製造所ナリ、○酒店ニハ大酒甕幷ニ一屋アリ、造営中ニテ埋没セルモノナリト［17］云、其証ヲ問ヘハ曰、中ヨリ一ノ器宇ヲ拾ヒ得ルコトナク、只陶瓶壺ニ白灰堊土ヲ盛リタルヲ得タリト、芝居ノ跡アリ、尤モ壮大ナリ、羅馬ノ搭獣観ニ比ス、是ヨリ左右ノ岡原、其下猶城邑ノ埋リタルニカ、ル、土ノ古街ヲ覆没セルコト、約二丈ヨリ以上ニ及フ、実ニ未曾有ノ災ナリシヲ知ル、因テ又未曾有ノ奇蹟ヲ得タリ、

帰路ノ中途ニテ、海浜ナル市街ノ内ニ一屋アリ、此府ヨリ地底ニ入レハ、亦「ポンペイ」同時ニ埋没セル城邑アリ、此モ亦久シク知ルモノナカリシニ、農民井ヲ掘リテ、地底ニ奇異ノモノアルヲ怪ミ、掘撥シニ、焼土ノ冷凝シテ岩石ヲナシテ、古キ市街ヲ包メルヲミル、因テ之

ヲ掘リ込シ〓ニ、略其市街［18］ノ状、石磴階子ノ跡ヲ認ム、其所ハ地面ヨリ四〓十六尺ノ下ニアリ、洞道ヲ作リ、磴ヲ存シテ入ラシム、手ニ燈ヲ執テ暗ヲ照ス、時ニ奇蹟ミル、古ヘ火山ノ噴出スルニアタリ、「ポンペイ」ハ遠シ故ニ灰土ノ軽キモノヲ飛シテ、且ツ冷ナルヲ以テ放鬆ナリ、此ハ甚タ山ニ近キヲ以テ、石ミナ熱シテ、圧下セルモノニテ、市街屋宅、為メニ爛レテ全カラサル所ナリト云

二十三日　晴

十二字五十分ニ蒸気車ニ上リ「ナァプル」府ヲ発ス、是ヨリ「モンウェシビシオ」ノ麓ヲ回リテ、「カセルス」ヲスキテ、「サンタマリヤ、パドワ」ノ駅ヲスク、「アペニエン」ノ山脈、車右ニ起伏シ、［19］余脈ハ車ノ左右ニ散ス、中ニ平野ヲ抱キテ山角〓差タリ断続シ、麓ニヨリテ村落アリ、堂尖参差タリ、野ヲ鋤シテ田トナシ、麦、蜀黍、豌豆ヲ種ユ、畛域ノ艸、芟除セス、其茂スルニ任ス、桑樹ヲ植ルコト稀ナリ、果樹、葡萄ミナ肥ユ、四十一「マイル」半ヲ走リテ、「サンタマリヤ」ゼルマン」ノ駅ニ達ス、○「サンゼルマン」モ亦山角ニヨリテ起レル一村邑ナリ、此ニ古寺アリ、霊場ニテ当国ノ民、初テ婚姻ヲナスモノハ、相携ヘテ遊行ヲナシ、此寺ニ参詣シテ、戒ヲ受クル所ナリ、是ヨリ「イブレタ」ヲ経テ、切通シノ道多ク、樹林アリ、平原ト相交リ、西南ノ山、其層複ヲ改メス、時ニ川ノ西流シテ去ルニ逢フ、八十六「マイル」ニテ、「カスセノ」駅ニ達ス、是ヨリ「フロシノネ」ヲ経テ、セキネニ至ルマテ、路傍ニ村邑ナシ、平原稍［20］開キ、山足ニ村邑ヲミル、一路田野ニテ、土壌甚タ肥ユ、此ヲスキテ、西南ノ山脈尽キテ、北方ニ「アルハナ」山アリ、起リ其余脈ヲ走ル、此山高峻ニテ、西南ハ海ニ際シテ山ナシ、平野縹緲トシテ、雲ニ連リ海ヲミス、烟雲ヲミル、是ヨリ日暝シ、スヘテ百六十二「マイル」半ヲ走リテ、羅馬ニ達シ、旧寓旅館ニ宿ヲナス、

二十四日　晴

二十五日

此日午後王宮ニ至リ王ニ謁シ〓、別ヲ奏シ〓請フ、

午後三字ヨリ「セント、ポール」寺、及ヒ古牢獄ヲミテ、「モントピンショウ」苑ニ遊ヒ帰ル、寺及ヒ獄ハ、已ニ前記ニ詳ラカ［21］ナリ、「モントピンショウ」ハ、羅馬ノ「パーク」中ニテ、尤モ卉花粉菲シテ幽妍ナルノ地ナリ、東方ノ岡上ヲ占メテ、府中〓ノ半ヲ俯瞰シテ眺望快シ、其背ニアタリ大苑アリ、巨樹暢シ艸岡坡陀タリ、車ヲ駆テ散遊スルニヨロシ

二十六日　晴

此日午前ニ魯西亜ノ皇后伊以大利ニ遊ヒテ、当府ニ入ル、兵隊駅側ヨリ、我旅館ノ前ヲ固メテ、従車数十輛、宮女、宮従、ミナ車ニテ前後ニ従ヒ、車廂蓋ナク絡繹トシテ府街ヲ馳セヌ、

夜九字四十五分ニ羅馬ヲ発ス

註

［1］ 1. 白表紙本ではタイトルに「第七十四巻」（七十五を訂正）が付く。2. カセルタ Caserta。［18］ではカセルス。なお、この王宮訪問については、岩倉翔子「カゼルタ王宮訪問」、岩倉 一九九七／二〇〇三：六七―八五を参照。3. ナポリ Napoli。［3］ではナアプル、［4］ではナァフル。4. イタリア国王ヴィットリオ・エマヌエーレ二世（在位一八六一―七八）。『実記』では「皇帝」と表記されるが、白表紙本では「王」「国王」が用いられている。

［3］ 1. ヴェズヴィオ Vesuvio（伊語）、ウェスウィウス *Vesuvius*（羅語）。［7］ではモンウェシビシウス、［12］ではモン、ウェシビシウス、［18］ではモンウェシビシオ。2. イタリア。『実記』では「以太利」が主流。白表紙本では「大」「太」が混在。

［4］ 1. ［20］にも同様の表現がある。久米旧蔵の『アップルトン』：六一四にも同距離が掲載されている。2. 現在の市立公園 Villa Comunaleに面していたホテル・ダングルテール Hotel d'Angleterre のこと。『アップルトン』に広告が掲載されている（"Advertisements", p.113）。当時のイタリアの新聞では、新聞社によって Hotel d'Angleterre または Albergo Gran Bretagne となっている。どちら

も隣接しており、同系列のホテルであった。Hôtel Gran Bretagne et d'Angleterre となっている宣伝用絵葉書もある。このホテルについては、岩倉 一九九四a：一二四、同 一九九四b：一〇六―一〇八、同 一九九七／二〇〇三：一二九―三一、藤沢 二〇一〇を参照。3．『実記』では、約三〇〇字の追加があり、紅鬣に関する記述などがある（田中『実記』四：三二三、三二五）。白表紙本にもすでに追加部分の記述があるが、それをさらに朱筆訂正して、『実記』と同内容になっている。4．「南」の誤りか。5．久米筆の黒表紙ノート（久米美術館蔵）に同経緯度が記されているため、ノートのデータを基にしたと推察される。6．本史料執筆段階では、正確な数字を記した資料が手元になかったようである。白表紙本および『実記』に記されている人口数四十四万八千七百四十三人は、関係基礎史料「鵬程随筆」（久米自筆）に基づくと思われる（久米美術館編『久米邦武文書 三』吉川弘文館、二〇〇一、三五一）。この人口数は、一八七一年の戸口調査結果と同一である（*Statesman's Year Book*, 1875, p.315）。7．以下、「兵アリテ之ヲ守ル」までは、白表紙本で朱筆訂正により『実記』とほぼ同内容になる。8．イタリアは一八六一年に統一されている。この年から十二年後が使節団の訪問（一八七三年）にあたる。9．サルデーニャ Sardegna。10．王宮パラッツォ・レアーレ Palazzo Reale。

［5］ 1．カステル・ヌオヴォ Castel Nuovo のことか。2．使節団は、マルセイユから日本へ向けての帰航で同年七月二二日に短時間ではあるがナポリに上陸している（第五編「第九十四巻 地中海航程ノ記」）。そこでもナポリの街の不衛生さや金銭を無心する民衆、またヴェズヴィオ火山や湾内の「絶景」について再び触れている（田中『実記』五：二四五―四六）。なお、九四巻の挿絵「那不児府王宮ノ広逵」については、本稿補論を参照。

［6］ 1．カトリック教。白表紙本で「羅馬『カトレイキ』」に朱筆訂正。2．聖母子像。3．フィレンツェ Firenze。［11］では仏羅綾。4．『実記』では、この後に約七〇〇字にわたって統一戦争時代のナポリの記述が追加されている（田中『実記』四：三二六―二七）。白表紙本では、この部分が久米筆で別紙追加。

［7］ 1．国立博物館。現ナポリ国立考古学博物館。博物館の歴史については、*MANN*, pp.11-14 を参照。2．久米の手帳には「ポンヘー［＝ポンペイ］より掘出しのモザイル［＝モザイク］、ナイル禽獣図」という字が認められ、ナイル川風景のモザイクが記録されている。ポンペイ「ファウヌスの家」出土の舗床モザイクのことか。

［8］ 1．後出のラテン碑文のことか。2．この三種類の文字については、『実記』には記述がなく、白表紙本の段階ですでに削除されている。漢学者である久米が碑文に対して興味を抱いていたことをうかがわせる貴重な箇所である。これらの文字は久米の手帳にも認められる。3．この文字は、P]OST QVINQVENIVM POP[VLEI となり、『タブラ・ベンビーナ *Tabula Bembina*』（inv. 2636）の一部と思われる。本史料の文字は、前二世紀の『不法徴収に関する法律 *lex repetundarum*』（*CIL*［ラテン碑文集成］I², 583）の六六行目にあたる（図3）。上段三つおよび下段ひとつからなる四つの塊のうち、下段のものにその文字が認められる。この青銅板については、M.H. Crawford (ed.), *Roman Statutes*, London 1996, pp.65-112, figs. I

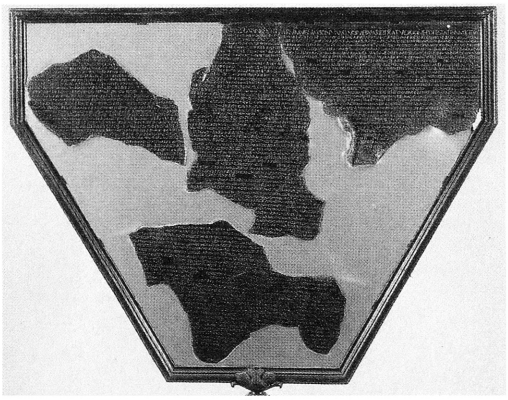

図3 『タブラ・ベンビーナ』（*MANN*）

-IIを参照。図は、*MANN*, p.356（下）より。4．ヘルクラネウムの「パピルス荘」出土の炭化したパピルス巻物が想起される。「パピルス荘」は十八世紀に発掘が開始され、使節団の博物館訪問時には、「パピルスの間」において巻物の一部が展示されていた。「パピルス荘」の巻物はギリシア語によるものが多いが、この字体はギリシア語ではない。また、ローマ時代のラテン語の字体とも似ておらず、むしろイタリア語のように見える。最初の文字は大文字のPともDともとれるような形をしているが、これは装飾的な字体のPに酷似している。するとPiantaと読める。Piantaはラテン語にはないことから、イタリア語である可能性が高い。Piantaは「植物、地図」などを意味する。次のimmaturaは「未熟の、未完成の」といった意味である。いずれにしても、パピルス巻物そのものではなく、博物館にあった解説等を写したのではないか。

［9］1．以下の模写生とのやりとりなどについては、『実記』では削除。白表紙本では、浄書段階で本史料内容よりも一部追加記述あり。現地での体験に基づくイタリア人観を伝える貴重な記述である。2．現在は展示室となっている。

［10］1．ローマのカラカラ帝浴場出土の水盤。久米の手帳にも「カラカラ帝の浴場にありし水瓶紫及［または色?］のマーブル」とある。中庭には、カラカラ帝浴場出土の大型水盤が設置されている。ファルネーゼ・コレクションのひとつであり、赤紫色のエジプト（埃及）産斑岩製で蛇や仮面の装飾がついている。口径二九六㎝。本史料の水盤は「其径一丈五尺」とある。一尺を約三〇㎝とすると約四・五mであり、中庭の水盤と寸法が一致しない。また、「高サ」と記した箇所を削除し、（短径一）「丈三尺許ノ楕円形」と続けている。中庭の水盤は円形である。これらのことから、本史料の水盤と博物館中庭の水盤とは異なるとも思われる。博物館にはカラカラ帝浴場出土の水盤がもう一基あるが、それは複数断片の状態で修復されていないまま一部が中庭に置かれている。本史料の水盤は形状がわかるので、その断片状のものではないであろう。寸法は一致しないが、中庭の水盤以外に候補はない。中庭の水盤については、A. Ambrogi, *Labra di età romana in marmi bianchi e colorati*, Roma 2005, pp. 182-187, 502-503（L. 8）を参照。なお、久米はローマのヴァチカン美術館でも同様の水盤（『実記』「第七十六巻　羅馬府ノ記下」では「水盥」）を目にしている（田中『実記』四：三〇六）。その水盤は「一堂ノ中央ヲ専ラニ」しており、「紫色ナル花剛岩」製で「正円形ニシテ径二丈ニ近シ」とある。おそらく「サーラ・ロトンダ Sala Rotonda」（＝円形の間）中央を占める赤紫色の斑岩製の水盤であろう。しかし、実際の寸法は直径四七六㎝（Ambrogi前掲書：一九四頁［L. 12］）であり、「二丈」（＝約六m）には及ばない。久米が見た目で寸法を記述していたと推察することは可能であろうか。なお、『実記』の度量衡に関しては、高田誠二「『米欧回覧実記』に現れる度量衡」、田中彰・高田誠二編『「米欧回覧実記」の学際的研究』北海道大学図書刊行会、一九九三：二一五―二二四）を参照。

［11］1．ヴェネツィア Venezia。白表紙本では「フェニシャ」と朱筆訂正。

［12］1．卵城（カステル・デッローヴォ）Castel dell'Ovoのことか。2．ポシッリポの洞窟 Grotta di Posillipo（別名ナポリの地下道 Crypta Neapoletana）。ナポリ～ポッツォリ間を結ぶ道として初代ローマ皇帝アウグストゥス時代に建造された。『アップルトン』：六二一では、ネロ帝時代のものであるが、それよりも遡る説もあると述べられている。このトンネルについては、S. De Caro, A. Greco, *Campania*, Roma-Bari 1993, p.35を参照。なお、成島柳北『航西日乗』では、明治六年四月一日にナポリ近郊の「地道」を訪れたことが述べられているが、これもポシッリポの洞窟であろう（井田『幕末』：一〇九）。3．ローマのコロッセウムに似ている「観場ノ基礎」とは、ナポリ近郊ポッツォリ Pozzuoli の円形闘技場跡のことか。4．コーニッキは、カステル・ヌオヴォ Castel Nuovo かとしながらも、ナポレオン時代のナポリ王ジョアシャン・ミュラに関連する宮殿の可能性を挙げている（Kornicki 2002, p.338）。カステル・ヌオヴォは、十三世紀にフランスのアンジュー家出身のナポリ王カルロ一世（＝シャルル・ダンジュー）によって建造されたため、由来としては久米の記述に合うが、海沿いに位置するため、久米の「山上」という記述と一致しない。推測の域を出ないが、四行目の「南」

が「北」の誤りであれば、眺望のよい丘上に位置するカポディモンテ Capodimonte の宮殿（現カポディモンテ美術館）の可能性がある。この宮殿は一七三八年にナポリ王であるブルボン家のカルロス七世によって建造が開始された。十九世紀初頭には、ナポレオン一世の兄でありナポリ王となったジョセフ・ボナパルトや前出のミュラの住居にもなった。カステル・ヌオヴォの由来とカポディモンテ宮の歴史とが混同された可能性も想定できる。カポディモンテの庭園には雉園 Fagianeria があり、久米の「諸禽ヲ養ヒテ草中ニ戯ルヽ」という記述にも近い。なお、方位の誤記があるのは、これまでにも知られている。本史料では、ナポリからみたポンペイの位置［12］やローマにおけるピンチョ丘［21］の位置が実際の方位と異なっている。5．ポンペイの位置は、ナポリの南または南東。

［13］ 1．『アップルトン』では、ローマ時代におけるポンペイの人口に関する記述は認められない。当時の代表的な旅行案内書『ベデカー』：一一七では、人口三万人とある。現在では一万人程度と推定されている（W.M. Jongman, "The Loss of Innocence", J.J. Dobbins & P.W. Foss (eds.), *The World of Pompeii*, London & New York 2008, p.499-517）。2．ヴェズヴィオ火山の噴火は後七九年。『アップルトン』：六二五でも七九年。ローマ時代の歴史家タキトゥスは、後五九年にポンペイの円形闘技場での乱闘事件について書き残している（『年代記』一四巻一七）。七九年の噴火以前にポンペイ一帯を襲った大地震は後六二年とされる。本史料「紀元五十六年」の数字はそれらのいずれとも一致せず、この年代の典拠は不明である。なお、成島柳北『航西日乗』でも噴火は七九年となっている（明治六年四月二日見学。井田『幕末』：一〇九）。

［14］ 1．海の門 Porta Marina. 2．集古館 Antiquarium. 3．一八六三年にはじめて取出しに成功した石膏遺体。「丈夫ノ屍」は、『実記』挿絵「同［＝ポンペイ］古死屍」として掲載。石膏遺体および『実記』挿絵については、藤沢 二〇一〇を参照。

［15］ 1．水道管。

［16］ 1．当時のポンペイ遺跡監督局長ジュゼッペ・フィオレッリ Giuseppe Fiorelli のことか。2．フォルム（公共広場）の北西、アポロ神殿の北に位置するアエラリウム *aerarium*（第七区第七街区二九番）［＝都市の宝庫、金庫］のことか。3．フォルムの南西に位置するバシリカ *basilica*（八・一・一）のことか。4．学校は、フォルム西柱廊の北側（七・七・三〇）にあったとされる。5．浴場は複数あるが、これまでの記述がフォルム周辺に集中しているため、「フォルムの公共浴場」（七・五）のことであろう。6．娼館（七・一二・一八）。7．中央広間。周囲に複数の小部屋が配され、小部屋の入口上部の壁には「春画」が描かれている。なお、『実記』のポンペイの挿絵には、恋愛場面を描いたものがあるが、これはこの娼館ではなく、「竪琴弾きの家」（一・四・五、二五）出土のものである。ポンペイに関する挿絵については、藤沢 二〇一〇を参照。8．娼館に隣接した羊毛縮絨工場 *fullonica*（七・一二・一七、二一）のことか。当時のガイドブックには、以下のように、この建物を「石鹸工場」としているものもある（N. Pagano, *Guida di Pompei*, 6ª ed., Napoli 1875, p.40, "Fabbrica di sapone"）。この著書の一八七三年版では、戸口の番号が二四になっているが、七五年版で改訂されている）。なお、フィオレッリは、この建物を *fullonica* としている（*Descrizione di Pompei*, Napoli 1875, pp.285-86）。

［17］ 1．石灰のこと。2．ポンペイには大劇場および小劇場（または音楽堂）がある。しかし、「羅馬ノ挌獣観［＝コロッセウム］ニ比ス」と続いていることから、ポンペイ遺跡南東に位置する円形闘技場アンフィテアトルム *amphitheatrum* を指していると思われる。なお、円形闘技場は『実記』挿絵「同［＝ポンペイ］古観場」として掲載されている。『実記』七五巻では、コロッセウムの挿絵のタイトル・キャプションにも「古観場」が用いられ、「コロシュム」とルビが振られている。「格獣観ハ（即チ「コロショム」一名ハ「アンフシェター」［＝amphitheater（英）］トモ云）」とも述べられている（田中『実記』四：三〇二）。なお、「芝居」という言葉は、必ずしも人間による劇あるいは劇場を示すのではなく、ローマの競馬場 *hippodromus* の訳語「馬芝居」としても登場する。3．ヘルクラネウム *Herculaneum*（現エルコラーノ Ercolano）のこと。白表紙本では、墨筆訂正で地名および発見年が追加される。

[18] 1．「石磴階子」は、劇場の階段状観客席のことか。農民が井戸を掘削していて発見した場所は、後に劇場跡であることが判明した。現在の街がある地面から劇場上部までの距離は、本史料の数値とほぼ一致している。劇場については、G. Tosi, *Gli edifici per spettacoli nell'Italia romana*, Roma.2003, p.141 ; A. Maiuri, *Herculaneum*, English 7 th ed., Roma 1977, pp.70-74 を参照。2．手帳には、一二時五〇分ナポリ出発から「半時」でCancella（＝カンチェッロCancello）、その後Ma-（マッダローニMaddaloniのことか）、「カスセルカ［＝カセルタ］、サントマリヤ［＝サンタ・マリア］、カプア」を過ぎ、「サアンゼルマン」［＝サン・ジェルマーノまたはカッシーノ］に四時に到着と記録される。カンチェッロおよびマッダローニは『アップルトン』にはないが、『ベデカー』：一〇にはローマ～ナポリ間の鉄道駅として掲載あり。3．カセルタ。4．本史料ではひとつの地名のように記されるが、白表紙本や『実記』では「サンタマリヤ」と「パトワ」に分かれている。後者は、パドヴァPadovaのことであろうが、この都市は北イタリアに位置するため、実際には南イタリアのカプアCapuaを指していると推定される。手帳には、パドヴァではなくカプアの地名が記されている（註2）。なお、『アップルトン』：六一五では、サンタ・マリアSanta Mariaとカプア Capuaの地名がある。これらは、それぞれサンタ・マリア・カプア・ヴェーテレSanta Maria Capua Vetereとカプア Capuaにあたると思われる。5．アペニン山脈。

[19] 1．サン・ジェルマーノSan Germano．ローマ時代の地名に因み一八六三年にサン・ジェルマーノからカッシーノCassinoに改名。『アップルトン』：六一五では、「サン・ジェルマーノ、別名カシーノCasino」とある。綴りはやや異なるが、地理的・歴史的にカッシーノと同一であろう。『アップルトン』でもサン・ジェルマーノ付近に「すばらしいカシーノ山修道院Monastery of Monte Casinoがあり、訪れるに値する。」と述べられている。2．イゾレッタIsolettaのことか。この地名は『アップルトン』に掲載されている。Kornicki 2002, p.336；水澤『実記』四：三七八（「イソレタ」）も参照。3．発音からカッシーノのことであろうが、すでにカッシーノ（＝サン・ジェルマーノ）を過ぎているため、別の地名と取り違えていると推察される。白表紙本および『実記』には、「八十六『マイル』ニテ」その駅に到着したとある（田中『実記』四：三三五）。コーニッキは、「カスセノ」は、チェプラーノCeprano であるとしている。その根拠として、チェプラーノは、『アップルトン』によればナポリから八六マイルであり、またローマ教皇領とナポリ王国との国境にあたるとしている（Kornicki 2002, p.338）。4．フロジノーネFrosinone．5．セーニSegni．ナポリから一二二マイル半（『アップルトン』六一五）。

[20] 1．アルバーニ丘陵Colli Albani．これを北に見ているため、ヴェッレートリVelletri経由であろう。2．『実記』七五巻「羅馬府ノ記　上」五月十一日に記されている「ホテル、デ、コンスタンチン」（田中『実記』四：二九〇）。バルベリーニ広場に近いサン・ニコラ・ダ・トレンティーノ通りVia S. Nicola da Tolentinoにあったホテル・コスタンツィHotel Costanziのこと。現在はドイツ・ハンガリー教皇庁館になっている（岩倉翔子「イタリアの四都市訪問」岩倉 一九九七／二〇〇三：一二七）。ホテルは『アップルトン』：五六七に「イタリアで最大最良のホテル」として紹介され、巻末には広告もある（"Advertisements", p.137）。当時まだ新しく、経営者は企業家ドメニコ・コスタンツィであった。彼については、*Dizionario biografico degli Italiani*, Roma 1984, *s.v.* "Costanzi, Domenico" を参照。3．サン・ピエトロ大聖堂。4．『実記』七六巻「羅馬府ノ記下」には、五月一六日の「羅馬時代ノ牢獄」見学が述べられる（田中『実記』四：三一四）。同一の遺構であろう。5．ピンチョ丘Monte Pincio．白表紙には「モンビショウ」ともある。『実記』ではヴェズヴィオ火山（「モンヴェスシオ」との混同がみられるが、本史料では正しい地名が記されている。ピンチョ丘については、本稿「補論」も参照。

[21] 1．ボルゲーゼ公園のこと。2．実際の方位は北である。

【補論】

『米欧回覧実記』カセルタおよびナポリの挿絵に関する一考察

岩倉使節団は、明治四（一八七三）年五月十九日夜にローマからナポリに向い、翌朝ナポリ近郊のカセルタに立ち寄る。夕刻ナポリに到着し、三泊して二十三日にローマに戻る。そこで三泊して二十六日にヴェネツィアへ向かう。五月二十～二十六日ついては、『実記』第四編「第七十七巻　那不児ノ記」に述べられており、六点の挿図が掲載されている。カセルタ及びナポリの挿絵が各一点、ポンペイの挿絵が四点である。ポンペイに関する挿絵の豊富さが注目される。[1]

その後、使節団はオーストリア、スイスを経て、同年七月二十日にフランスのマルセイユから日本へ向けて帰航する。二十二日にナポリに投錨し、使節団は短時間ではあるが再びナポリの地を踏んでいる。第五編「第九十四巻　地中海航程ノ記」には、二十六日のスエズ運河到着前までが綴られており、そこでもナポリの街の不衛生さや金銭を無心する民衆、またヴェズヴィオ火山や湾内の「絶景」について再び触れられている。九四巻にある挿絵は二点で、そのどちらもがナポリ風景を扱ったものである。ナポリが使節団にとって、あるいは「編修」者の久米にとっていかに印象的であったかがうかがわれる。

本稿では、これまで原図や場所の検証について指摘のなかったカセルタ挿絵および九四巻ナポリ挿絵中の一点をとりあげる。

（一）カセルタ挿絵（七七巻）について

カセルタの王宮には丘陵にかけて広大な庭園が続き、滝や池が直線上に配されている。『実記』七七巻では、庭園の景観が詳細に述べられている。[2] カセルタの挿絵「以大利那不児近在『カセル宮」（図4）には、庭園の一部が表わされている。前景全面を占め、中景右にかけて傾斜を上る歩道が続き、その左に彫像で装飾された、滝の落ちる池が広がる。画面中央には、池の障壁先端に女性像が立ち、その脇で二人の男性が池を眺めている。後景には、鬱蒼と茂る木々や山が見えている。

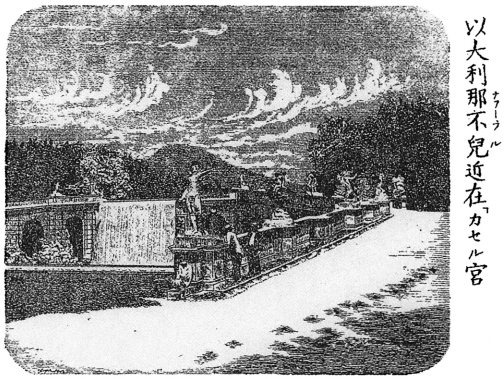

図4　『実記』77巻挿絵「カセル宮」（太政官版）

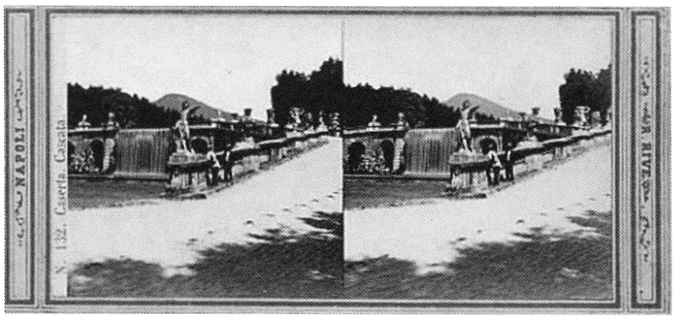

図5　リーヴェのステレオ写真「カセルタ、滝」（Wikimedia）

挿絵に表わされた池は、『アイオロスの泉』である。

この挿絵の原図については、同時代の写真家ロベルト・リーヴェ Roberto Rive のステレオ写真に酷似したものがある（図5）[3]。アングルはほぼ同じであり、池を眺める二人の人物も同ポーズである[4]。

（二）ナポリ挿絵「那不児府王宮ノ広逵」（九四巻）について

前述のように、『実記』九四巻では、ナポリに関する挿絵が二点掲載されている（「那不児府王宮ノ広逵」「同府ノ全景及ヒ『ヴェスシオ』火山」）。『実記』の多くの挿絵と同様に、一ページに上下二枚の絵で構成されている。前者にはオベリスクのような柱を中心とした広場と遠景の建物の俯瞰図が、また後者には海浜の街並みと遠景に噴煙を上げる山が描かれている。後者は、一見してナポリの街とヴェズヴィオ火山であることは明らかである。

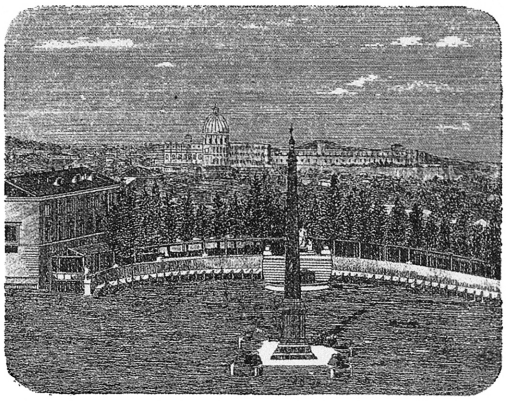

図6　『実記』94巻挿絵「那不児府王宮ノ広逵」（太政官版）

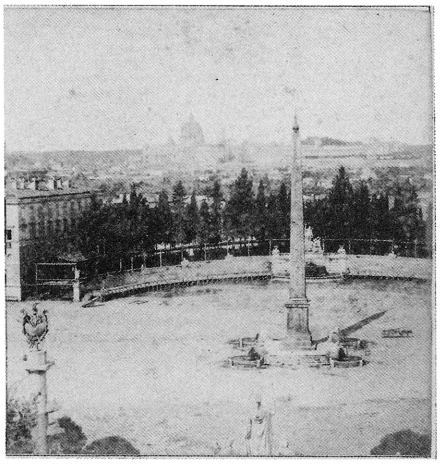

図7　ゾンマーのステレオ写真（右）ローマ、ポポロ広場（筆者蔵）

前者の挿絵（図6）については、キャプションではナポリ王宮となっているものの、実際に描かれている景観は、ローマのポポロ広場である。挿絵の前景ほぼ中央に立つのは、広場のオベリスクであり、その背後に『ネプトゥヌスの噴水』が見えている。遠景の円形屋根がついた建物は、サン・ピエトロ大聖堂である。広場と建物の位置関係などから、挿絵は、広場の東にあるピンチョ丘からの眺望であることがわかる。『実記』には、挿絵の誤用された例が幾例かあることはすでに知られている[5]。

使節団はこの景色を目にしているはずである。本稿で扱った久米手稿（文書番号八三）によれば、使節団は、ナポリからローマに到着した五月二十三日にピンチョ丘（「モントピンショウ」[21]）を訪れている。『実記』では、その箇所は「モンヴェスシオ苑」または「モンヴェスシウォ苑」となっていることから、名称・挿絵ともに何からの取違えがあったようである。

本挿絵の原図については、同時代の写真家ジョルジョ・ゾンマーGiorgio Sommer のステレオ写真に酷似したものがある（図7）[6]。左の写真脇にはキャプションがついており、「No.8 ピンチョ丘から撮影したポポロ広場（ローマ）Piazza del Popolo presa dal Monte Pincio (Roma).」とある。挿絵には、写真前景左の円柱（ロストラの一部）、中央の彫像、植栽といったものは描かれていないが、その部分を取れば挿絵と同様になる。『実記』挿絵において、原図の一部が変更されている例は、これまでにも知られている[7]。また写真ではオベリスクが落とす影の右に馬車らしきものが通っているが、挿絵には描かれていない。しかしながら、よく観察すると、ほぼ同

じ位置に黒色の濃い部分がある。これは、原図に何かあった痕跡と推察され、写真の馬車と対応する。[8] 挿絵では、写真よりも左右が広く描かれているが、模写時の変更の可能性もある。写真は一八五七―六六年に撮影された。[9] ゾンマーのステレオ写真は、『実記』ポンペイ挿絵にも用いられており、挿絵原図の可能性として彼の写真が再び登場するのは興味深い。[10]

補論　註

（1）ポンペイの挿絵については、藤沢 二〇一〇を参照。

（2）使節団のカセルタ訪問については、本文註［1］2を参照。

（3）リーヴェは、一八六〇年代～八〇年代にナポリで活動していた。リーヴェおよびステレオ写真については、Hannavy 2008, *s.vv.* “Rive, Roberto”, “Stereoscopy” を参照。

（4）この写真では雲が確認できないが、空の状態は挿絵制作時における脚色の可能性もある。挿絵の空の状態が変更されている例がある（久米美 二〇〇六：二四、二九）。

（5）久米美 二〇〇六：二九。

（6）ゾンマーについては、Hannavy 2008, *s.v.* “Sommer, Giorgio”；藤沢 二〇一〇などを参照。

（7）久米美 二〇〇六：二四。

（8）馬車らしきものと対応する挿絵の黒い部分については、久米美術館所蔵の試刷（『特命全権大使「米欧回覧実記」銅版画集』久米美術館、一九八五：二一三）や水澤『実記』五：二六八など、より鮮明な例もある。

（9）ゾンマーは、活動初期のこの期間にベーレス Behles とスタジオ会社を共同経営していたため、台紙の印刷が連名になっている。ゾンマー撮影によるステレオ写真台紙の分類については、Fanelli 2007, pp.44-45 を参照。

（10）このステレオ写真は、おもにヴェネツィアで活動していたメガネ商兼写真家カルロ・ポンティ Carlo Ponti の写真としても存在する（同カタログ番号、同キャプション・タイトル。ウィキメディア画像 URL:http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ponti,_Carlo_(ca._1823-1893)_-_n._008._-_Piazza_del_popolo_presa_dal_Monte_Pincio_(Roma).jpg 二〇一〇年一〇月一日接続）。ゾンマーは、配給業者を通して自分の写真を販売してもいた。そのため、撮影者である彼自身の名前のないまま、配給業者名のついた台紙で販売されることもあった（Fanelli 2007, p.35）。ポンティの台紙によるステレオ写真もその一例であろう。なお、ポンティについては Hannavy 2008, *s.v.* “Ponti, Carlo” も参照。

文献略記

『アップルトン』＝『アップルトン図入りヨーロッパ旅行ガイドブック』*Appleton's Illustrated European Guide Book*, 5 th ed., New York 1872. 久米美術館蔵

井田『幕末』＝井田進也『幕末維新パリ見聞記』岩波文庫、二〇〇九

岩倉 一九九四 a＝Iwakura, S. (ed.) *Il Giappone scopre l'Occidente. Una missione diplomatica (1871-73)*, Roma.

岩倉 一九九四 b＝Iwakura, S. (ed.), *Prima e dopo la Missione Iwakura. Testimonianze inedite*, Roma.

岩倉 一九九七／二〇〇三＝岩倉翔子編著『岩倉使節団とイタリア』京都大学学術出版会、初版一九九七年、第二版三刷二〇〇三

久米美 二〇〇六＝久米美術館『「銅鐫にみる文明のフォルム―『米欧回覧実記』挿絵銅版画とその時代展」資料集』久米美術館、二〇〇六

白表紙本＝『米欧回覧日記　四編中・下』（文書番号G17）久米美術館蔵

田中『実記』＝久米邦武編『特命全権大使 米欧回覧実記』田中彰校注、岩波文庫、一九八〇

手帳＝回覧中に久米がメモを記した赤褐色表紙の携帯用手帳、久米美術館蔵

藤沢 二〇一〇＝藤沢桜子「『米欧回覧実記』に描かれたポンペイ―挿絵銅版画をめぐって―」群馬県立女子大学紀要三一：八三―九六

『ベデカー』＝『ベデカー版　イタリア　旅行者ハンドブック3　南イタリア・シチリア編』*Italy. Handbook for Travellers by K. Baedeker. III : Southern Italy, Sicily*, 4 th ed., Coblenz & Leipsic 1873.

水澤『実記』＝久米邦武編著『現代語訳　特命全権大使　米欧回覧実記』水澤周訳注、米欧亜回覧の会企画、慶應義塾大学出版会、普及版二〇〇八
Fanelli 2007＝Fanelli, G., *L'Italia virata all'oro attraverso le fotografie di Giorgio Sommer*, Firenze.
Hannavy 2008＝Hannavy, J. (ed.), *Encyclopedia of Nineteenth-Century Photography*, New York & London.
Kornicki 2002＝G. Healey, C. Tsuzuki (eds.), *The Iwakura Embassy 1871-73*, vol.4, transl. by P.F. Kornicki, Matsudo.
MANN＝S. De Caro (ed.), *Il Museo Archeologico Nazionale di Napoli*, Napoli 2003.

謝辞

本稿執筆にあたり、久米美術館高田誠二参事に大変お世話になりました。同美術館所蔵の史料閲覧等に際して、伊藤史湖学芸員にもご面倒をおかけしました。また、同美術館は、本史料の活字化および写真掲載を快諾してくださいました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。なお、拙稿の内容についての責任は筆者にあります。